
フォースウィザード～神城洵の覚醒

有里 洵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フォースウィザード〜神城洵の覚醒

【Nコード】

N0559F

【作者名】

有里 洵

【あらすじ】

ごく普通の生活を送っていた神城洵が、ひよんな事からウィザードの能力に覚醒し、仲間と共に現実世界とは別の世界での繰り広げられる戦いの物語第一章。

プロローグ

俺は、現役の高校2年の神城 洵。

もともとは、県立高校の生徒だったが、親の都合で私立城明学園高校への転校が決まった。

「私立城明学園高校かあゝ前の学校いまいちだったからなあゝはあゝ。」

次の学校である私立城明学園高校では、あまり上手くやっていける気がしないのだが、これはもう慣れている。しかし、転校先である城明市には、最近妙な現象が起きると噂されていた。だが俺は、そんな事も気にせず転校先である城明市に向かっていった。

後に、その噂が原因で俺は災難に遭うことなど想像もしていなかった。

俺は、その日の夜に転校先である城明市に着いた。

辺りは殆ど真つ暗で空には薄く光る月が有るだけで、本当に静かだった。

俺は、

「本当に静かで良い街だな、これならもしかしたら素敵なお会いがあるかも！」俺は、もの凄く浮かれていた。と、その時何か上で誰かに見られている気配がして、上を見てみたが誰も居ないと思いきや家に入った。

「あれがそうなのね。楽しいゲームが出来そうね。明日が楽しみだわ！神城 洵君。」

そう言つて謎の人影は月に消えていった。

明日からは、城明学園高校への最初の登校だ、気合いを入れて明日に備える事にした。

その日の夢で不思議な夢を見た。

何やら町並みが見えるが人一人として居なく、そして何より月と空がとても赤いのだ。そしてよく見てみると、向こうに何か有るのだ

が暗くてよく見えなく見ようと思い、走ろうとした瞬間夢から覚め朝だと気付く。

そして、

「あの夢は何だったんだろう?」

疑問を抱きつつ、台所に行くのだった。

しかし、後に俺はあの世界を実際に体験するとは、誰も思わなかったのである。

第1話 登校

「行つてきまーす。」

俺は、今日初の私立城明学園高校の生活が幕を開けるのだが、初日から道に迷つてしまった。

「マジどうしよう、後40分後に予鈴がなっちまう！」俺は、焦っていたそんな時にいきなり後ろから叩かれた。

「おっはよお、ここらじゃ見ない顔だね？もしかして、噂の転校生？」

い、いつてえく・・・

俺は、何が何だか分からなかった。

「いきなり何だよ、て言うかお前誰だよ？」俺はいきなり後ろから叩いてきた奴に言った。

「あつ、ゴメン悪気があつたんじゃないから、本当にゴメンね。」その子は今にも泣きそうだった。

「べつ、別に気にしてないからそれより自己紹介まだだったな、俺は神城洵つて言うんだ、よろしくな！」俺は、その時不思議な感じがした。

「前に会つたことある？」

「えつ、無いつて何言いだすと思つたらもつ。」

その子の顔がだんだん赤くなつてきていた。「あつ、ゴメンそれより君の名前は？」

俺は、名前を聞いた。

「あつ、まだ言つてなかったね。櫻井明美つて言うのよろしくね。」彼女は櫻井明美つて言うのかあ。

「ヤバ、そろそろ時間ヤバいね。遅刻しちゃうよー！」そういえば、今俺はピンチだったのだ。

「行こう！」

俺は明美に付いていった。

「こつちで良いのか？」

俺は、明美に聞いた。

「だって、城明学園高校でしょ？」

確かに行き先はそうだが……。

「だったら任せて私、城明学園高校の生徒だから！」えっ、！

「本当か？なら助かるぜ。」俺は、そうして何とか遅刻せず学校に着くことが出来た。

マジで助かったあゝ。

「ありがとな、明美って居ねえ」

そろそろ職員室へ先生に挨拶しに行く時間になったので向かう事にした。

「クラスメイト良い奴が居たら良いなあゝ。」

そう思いつつ、職員室に入ってしまった。

第2話 櫻井明美

ガラガラあゝ。

「失礼します。今日からこの学園に転校しました神城洵です。」
職員室の先生達の視線がこつち側に集中していた。

「君、転校生かい？」

職員室の先生に聞かれた。

「はい、そうです。」

何だか職員室が騒がしい。

「ああゝなら神山先生、後お願いします。」

そういうと、その先生は慌てて職員室から出ていった。と、同時に職員室の奥から女の先生が出てきた。

「遅れて御免なさいね、私は貴方のクラスの担任の神山香野子つて言うのよろしくね。」

先生は少々息が荒れていたが、気にせず先生と一緒にクラスに向かった。

そして、クラスに着いた。ガラガラあゝ。

「はい、席に着いて今日は転校生を紹介するわ。さあ、入ってきて。」

「何だか、教室が物凄く騒がしかったが、勇気を出して入った。」

すると見た事のある顔が目の前にいた。

「あつ、櫻井！」

「えつ、洵君？」

一気に周りが静まった。

「えつ、何々あなた達知り合いだったの？」

先生も周りの生徒達もビツクリしていた。

「じゃあ、自己紹介してくれるかな？」

「はい、神城洵です。よろしくな！」

今学園生活がスタートしたけど、何だか上手くやっていける気がし

た。

「じゃあ、洵の席は櫻井さんの隣ね！そこしか空いてないからね。」
櫻井の隣の席へ行き話しをした。

「よろしくな！」

「うん、同じクラスになるなんて凄いね！」櫻井はそう言っているけど、俺はそんな気がしなかった。

「これから、大変だと思うけど頑張って行こう！」

今の櫻井の言葉で何か元気が出てきた。

そして、授業が終わり帰ろうとした時櫻井が話しかけてきた。

「ねえ、洵君暇なら一緒に帰らない？」

櫻井に誘われたので、一緒に帰る事にした。

「急に聞くのも何だけど、そのネックレスってどうしたの？」
いきなりだったのでビックリしたが真実を言った。

「これは、俺がまだ子供頃に家族から貰った宝物なんだ。」

「へえ、そうだったんだ。」

櫻井は、何だか深刻な顔していた。

「私、家そこだからじゃあね！」

櫻井はそう言っただけで家に入っていった。

「俺も、帰るかあ。」

俺は櫻井の事を心配しつつ家に帰る事にした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0559f/>

フォースウィザード～神城洵の覚醒

2010年11月14日11時15分発行